関門海峡

出来る間に出来るだけ

短編

山中與隆

Duo-Yamanka

出来る間に、出来るだけ

山中與隆

目次

出来る間に、出来るだけ　1
編者あとがき　67

出来る間に、出来るだけ

作　山中與隆

「出来る間に、出来るだけたくさんやりましょうね」を合言葉に始まったカルテットは、二年目を迎えていた。関門港を見下ろす大きな窓の広間に、練習のために集まってきた水野夫妻は、何十回と見慣れた

景色ではあるが、毎回必ず感嘆の声を発しない日はないのである。晴れている日が素晴らしいのは言うまでもないが、曇りや雨の日もまた情緒がある。夜であれば、まさに百万ドルの夜景と言いたくなる。

この屋敷で生まれ育った須藤章は、子供のころから関門港を眺めるのが好きだった。当時は貨物船が何隻も係船ブイに碇泊しており、通過する貨物船の数も多かった。下関の街そのものが本州から九州へ

の入り口、あるいは港町と言った独特の雰囲気をもっていた。ここから遠くない唐戸市場の賑わいも懐かしい。須藤章はこのようなかつての賑わいを知っているが、今は今なりに気に入っている。

彼が子供のころ父親はこの部屋でよくレコードを聞いていたが、楽器はやっていなかった。須藤章は、いまやこの家の主となってカルテットでチェロを弾いている。そして彼の妻須藤映子はバイオリンを弾

いている。

週一回のペースでここにやってきて、部屋に入るたびに感嘆の声を上げているのが水野芳江である。彼女もバイオリンである。そしてその夫の水野孝雄がビオラである。二組の夫婦はまったく同世代の夫同士、妻同士で、年齢差は数ヶ月以内しかない。二人の夫はともに七十三才、妻たちは六十七才なのである。

水野たちもここ下関市内に住んでいる。しかもここでそれぞれいろいろな音楽活動をしてきたのに、お互いを知らないでいた。もっとも水野たちは五年ほど前に関東地方からリタイア後のユーターンで下関に戻ってきたのだ。かれらは四人とも他の何らかの音楽グループに属しているが、それらは若い現役世代が中心のため、活動は土曜か日曜に限られている。そのようなグループに複数参加していると、土

日は身動きが出来ないくらい予定がいっぱいになる。しかし、須藤、水野の四人はいずれもリタイア組み。つまり平日の昼間に集まれるという、贅沢チームなのである。かれらがその贅沢な身分に、何か注文を付けたいとしたら、年齢がせめてもう十才ずつ若ければと言うところだろうか。それは残り寿命のことではなく、カルテットで難しいパッセージに出くわしたときに、それを克服できる反射神経や肉体の若

さが欲しくなるのである。

この四人によるカルテットの始まりはこうだった。お互いが知り合ったのは、広島においてであった。二〇〇九年の夏、アフィニス夏の音楽祭という催しが広島市で行われた。これはプロの音楽家のための室内楽セミナーである。世界的な指導者を迎えて、国内のプロオーケストラの団員たちが室内楽の指導

を受けるのである。その聴講のために、須藤夫婦も、水野夫婦も数日間泊りがけで広島にやってきていたのである。

毎日レッスン場にやってきて熱心に聴講する夫婦に、お互いすぐに気がついた。しかし、二日目くらいまでは、お互い顔があっても会釈する程度であった。もちろん相手が何処の誰かなど知る由もない。ただ自分たちと同じように非常に室内楽好きの夫婦

であることはすぐにわかった。

三日目、ロビーのベンチで昼飯としてパンを食べているときに、初めて言葉を交わした。そのときともに下関から来ていることを知った。しかし、お互いのことについてはそれくらいで、あとはセミナーの面白さや、指導者たちの素晴らしさなどを語り合ったのだった。

四日目、水野夫婦が会場近くのうどん屋で昼食を

していると、須藤夫婦が入ってきた。水野たちを見つけると、積極的に近づいて同席していいか訪ねた。

「もちろん」

となって四人は長い昼食を摂った。そのとき水野夫婦がバイオリンとビオラ、須藤夫婦がチェロとバイオリンをやっていることが明らかになったのだった。つまりちょうどこの四人で弦楽四重奏が出来るのである。お互いそれなりに室内楽を楽しんでいるとい

うことだったが、現役で仕事を持っている人たち相手では、練習できる日は限られている。

四人はその場で、弦楽四重奏団結成を約束した。もちろんお互いのレベルの問題もあるのでどのような楽団になるのかはわからないが、とにかくその点はどうであれ、平日に集まって心行くまでアンサンブルを楽しもうということになったのである。

広島でのアフィニス音楽祭が終わった翌月のある平日の午後一時が、新しい弦楽四重奏団のスタートの日と決まった。場所は日和山公園の中腹にある須藤家。夜でも音が出せる環境だと言う。水野たちも車で十分もかからない市内のマンションに住んでいるのだが、こちらは六畳一間を防音工事して練習が出来るようにしてあるが、六畳と言っても防音施工のために五畳くらいの広さになっていて、狭いのと

夜は弾かないことにしているのである。

さて、水野夫妻が部屋に入って、その広い部屋の素晴らしさと、関門港に向かって大きく開かれた窓からの眺めをひとしきり褒め称えると、いよいよ初めての音出しとなった。

四人はそれぞれケースから大事そうに楽器を取り出し始めた。須藤章のチェロは明るい飴色で何とな

く大きく見える。須藤映子の黒っぽくさえ見える濃い褐色のバイオリンは、古色蒼然としていて名器の雰囲気である。水野芳江がケースを開けると、シルクのような艶のある水色の布の袋にバイオリンはすっぽりと包まれている。おもむろにその袋から現れた楽器は、須藤映子のとは対照的に明るい褐色で、よく磨かれていて窓の外の明るさを受けてきらきらと輝いた。しかしこれも新しい楽器ではなく二百年

以上前の作なのだそうだ。最後に姿を現した水野孝雄のビオラは、須藤映子のバイオリンと似た濃い色で、その古そうな雰囲気はいかにも名器といった感じである。事実これも二百五十年前の名のある製作者のもので、もし本物なら数千万円というものらしいが、水野はそんな値段で手に入れたわけではないので、本物でないと思っている。しかし、本物と言い張っても通るほどの音をしているから、十分に満

足していると本人は言っている。現に彼がチューニングを始めると、深々としたビオラの音が部屋の中に響き渡った。須藤夫妻は、二人とも思わず楽器を鳴らしている水野孝雄のほうを見た。そしてこれだけの楽器で音楽を楽しんでいるのであれば、腕前も相当のものに違いないと確信したのだった。現にチューニングの五度の重音を弾く弓さばきも出てくる音の充実した響きも只者ではないことをうかがわせ

た。
「素晴らしい音ですね」
須藤章がチェロのエンドピンを伸ばしながら水野孝雄に話しかけた。
「ありがとうございます。楽器のおかげでチューニング名人と言われてましてね、曲を弾き始めるとすぐにぼろが出てきますよ」
と謙遜した。つまり開放弦だけを鳴らすチューニン

グでは楽器が持っている良い音が鳴り響くが、複雑な曲を弾き始めると腕前なりの音しか出せないと言う意味である。しかし須藤章は、水野孝雄の解放弦の弾きぶりから相当の腕の持ち主であることを悟ったのである。

それぞれがチューニングを始めたので、部屋の中は賑やかになった。水野孝雄のビオラだけでなく、他の三人のどの楽器からも安っぽい音はひとつも聞

こえてこない。四人ともがそれなりの楽器を持っているらしい。みな自分の楽器の音を合わせながら、周りから聞こえてくる音を感じて、まだ曲を弾いていないのに、四人ともがふさわしい相手にめぐり合ったことを予感していた。

やがてみなは勝手に音を出すのを止めて、チェロのＡ音に自分の楽器のＡ音を合わせはじめた。音が合ったところで、

「さて、何か手始めにやりましょう」
須藤章が言った。
「挨拶代わりはやっぱりモーツァルトの初期ですかね。わたし、楽譜を持ってきました」
水野孝雄が提案すると、みなそれでいいというようにうなずいた。
「いいですね。それなら私のところにもあるので、私のを使いましょう」

須藤章がそう言うと、須藤映子が壁際の楽譜棚から真っ赤な表紙の分厚い楽譜を取り出してきた。何段にもなった棚には室内楽の楽譜と思われるたくさんの本が分類されている。取り出されたのはベーレンライターの原典版だ。まだ新しいらしく表紙もピカピカだ。須藤映子が、赤い表紙にまとめられた中から、各パートの楽譜をそれぞれに配り始めた。

「ほう、立派な楽譜ですね。私のはおなじみのペー

タース版ですよ。もう長年使い古してどのページもよれよれで綴じも外れかかってしまいました。わたしはこの曲をベーレンライターでするのは初めてです」

水野孝雄がいうと、須藤章も、

「同じですよ。私も何十年とペータース版に馴染んできました。あんまり傷んだのと、先日東京のヤマハでこのきれいな表紙に釣られて、モーツァルトを

全曲買ってしまったのです。使うのは今日が初めてなんですよ」

と応じた。こんな会話が交わされているとき、須藤映子と水野芳江がなにかもめている。第一バイオリンと第二バイオリンをどちらがするかで譲り合っているのだ。誰が見ても明らかな力量の違いがある場合はともかく、アマチュアが四重奏を始めようとするときに必ず見られる風景である。弦楽四重奏の二

つのバイオリンパートは音楽の役割としてはどちらも対等に重要なのだが、そうはいっても第一バイオリンの方が主役であることは間違いない。また例外なく第一バイオリンの方が難しい。単純に言って高い音が多く速く細かい動きも多い。だから二人のバイオリンのどちらもが、一応相手を立てて自分は第二バイオリンでいいと言うのである。この場合は、水野孝雄が、

「とりあえず当家のご婦人がファーストをされたらどうでしょう。あとで交代してもいいのだし」
と言ったので、この件は決着した。
「じゃあ、なにをします？」
第一バイオリンの席に座った須藤映子が言った。
「何でもいいですよ」
と言ったのは、水野孝雄。
「１５７は？」

水野芳江が言うと、みながそうしようと言うことになった。

このように、初めてカルテットの四人が集まって、しかもそれぞれの腕前もわからないときによく取り上げられるのが、モーツァルトの初期の弦楽四重奏曲、しかもそれらが集められた楽譜の最初の方の数曲のどれかが選ばれることが多い。１５７と言うのはＫ１５７のことで、Ｋは、モーツァルトの膨大な

作品を、彼の死後ケッヘルと言う人が整理してつけた作品目録の番号を意味する。モーツァルトの作品を呼ぶとき、通はもちろんそうでない人もケッヘル番号で曲を覚えている場合が多い。

ハ長調のシンプルな主題が快く鳴り出した。第一楽章が何の問題もなく済むと、第二楽章もやろうと言うことになった。ここで水野孝雄のビオラが存在感を示した。この楽章はビオラが最低弦のCの開放

弦で先導する。一小節に一音ずつC、C、D、E，F、と実に見事なC線の響きを深々とした柔らかい音量で聞かせた。腕前もセンスもいいが、楽器も相当良さそうだ。ビオラのこの部分は、初心者でもすぐに弾ける簡単な音なのだが、水野孝雄のように弾くビオラはざらにはいない。心を震わせるようなビオラの音に導かれながら第二バイオリンの水野芳江が分散和音を弾き、第一バイオリンの須藤映子が主

題を弾いた。主題の終わりで十二小節目に静かに入ってきたチェロが、今度は威圧的ではないが豊かな音で、ビオラの役割を引き継ぐ。このチェロの音もビオラに負けない魅力的なものだった。ビオラは第二バイオリンの分散和音を引き継ぎ、二つのバイオリンはオクターブで主題を繰り返す。今度はフォルテの音楽である。四人に言葉はないが、響きの中に共に音楽で語りあっている仲間を意識しながら曲を

進めていく。

四人は次々とモーツァルト初期の弦楽四重奏曲を弾き進めていった。彼らは、Ｋ１５６、Ｋ１５５、Ｋ１５９とひとつの曲が済むと、次はこれと誰かが言って弾き続けた。三曲目から第一バイオリンと第二バイオリンが交代した。二人のバイオリニストは、音色も歌い方のニュアンスも少し違っているが、どちらも十分に役割を果たしている。

四曲弾き終えたところで、
「ちょっとお茶にしましょう」
と須藤映子が言ってようやく一段落した。
お茶の準備がされる間、お互いは満足したように称えあった。みなが良い四重奏団が出来たことを実感したのである。こうして広島で出会った四人の弦楽四重奏が、ここ日和山中腹の関門港を見渡す須藤邸で誕生したのである。

お互いの音楽に満足した興奮で会話が弾み、お茶の時間は長かった。その間何度か海峡を通過する船の汽笛が聞こえてきた。

第一バイオリンは、これからも曲によって交代することになった。それから、毎週一回のペースで集まることも決まった。そしてただ思いつくままにいろいろな曲を弾くのではなく、どれかじっくり仕上げる曲も決めて、楽しむだけでなく少し真剣に音楽

作りすることも取り入れようと言うことになった。先ほどの演奏でお互いの力量が確かめられたので、じっくり仕上げると言う候補曲がいろいろ挙がった。もう自分たちは相当の年なのだから、あまりのんびりやっていたらいくらも弾かないうちに、止めるときが来てしまうかもしれない。やりたい曲から取り組もうと言って、ベートーヴェンの後期の作品まで候補に出た。プロでもなかなか仕上げるのが大変と

言われる曲である。楽しい議論百出の中から結局モーツァルトの「ハイドンセット」と呼ばれる中期の傑作から俗に「春」などと呼ばれることのあるＫ３８７のト長調の曲が決まった。

この日は、長いお茶のあとその「春」を一度通してからお開きとなった。

とにかくあと何年出来るかわからないのだからと

いう意識がみなの中にあり、一回一回の練習を大切にする気持ちは共通していた。四人それぞれ他の音楽活動も続けたが、数ヵ月後には、ほとんどこの四重奏の活動が中心となっていた。特に演奏会を計画するわけでもなかったが、とにかく四人が心を合わせて音を響かせあうことに何にも変えがたい喜びを見出していたのである。

いつまで出来るかわからないと言いながらも、彼

らはある目標を定めた。モーツァルトのハイドンセット以降の八曲、ベートーヴェンの初期の六曲と中期の五曲、それに後期の中から二曲くらい、その合間にはハイドンのたくさんある傑作の中から八曲くらい、そしてシューベルトから四曲、ブラームスから少なくとも二曲とおよそ三十五曲が、仕上げる曲としてリストアップされた。須藤章がそれらを紙に書き出して、壁にピンで留めた。

一曲を一月で仕上げても三年かかる。しかし実際には最初に取り上げたＫ３８７はひとつの楽章を仕上げるのに一ヶ月近くを要し、結局四つの楽章をなんとか、

「これくらいにしておこうか」

と言えるようになるまでに三ヶ月かかった。このペースで単純計算すると九年かかることになる。そのとき夫たちは八十二歳、妻たちは七十六歳である。

最近はみな長寿である。九年後にも今と同じように元気に楽器を鳴らしているようなら、そんなに嬉しいことはない。

「目標は高い方が良い」

とみんな自分たちの演奏寿命が約束されたような気になって、毎週の集まりを楽しんだ。

しかし暗雲が漂い始めたのは早かった。日和山の

四重奏が始まって二年目の冬、チェロの須藤章が人間ドックで胃がんを発見されたのである。それよりはやく水野孝雄は前立腺がんの疑いがあったが、幸い前立腺肥大と言うことで、薬で尿の問題を抑えて一応普通の生活を続けていた。須藤章の場合は、一年前の検査ではどうもなかったにもかかわらず、すでに症状はかなり進んでいると言うことであった。がんの発生している範囲が広いために手術は難しい

というのである。最新式の治療を採用することになったが、病院は一年以上の長期戦を予想しているらしい。一月に一週間くらい入院して抗がん剤を投与して、三週間は自宅に戻って療養すると言う形になった。自宅に戻っているときは、四重奏の集まりは続けられた。しかし、治療の影響もあって、それまでのように精力的に練習すると言うわけにはいかなかった。集まりのための個人練習も思うに任せない

し、集まりのときにも、長時間の合奏は無理であった。それでも可能な範囲でと言うことで会は続いた。

その間に水野芳江が持病の狭心症の調子が悪くなって、何度か練習会が中止になることがあった。日和山の四重奏団が、がんばろうと立てた目標まであと七年であったが、みなは何とかこの危機を乗り切って、目標に少しでも近づくことを願った。

須藤章の治療が始まって十か月目あたりから体調

は極度に悪くなって、四重奏の会は中止のやむなきにいたった。

一方水野芳江の心臓も不安定な状態が続いていた。循環器科の診察を受けたが好転はしなかった。さらに水野孝雄は、ちょうどこの中止の期間を利用するかのように、大腸がんが見つかり、こちらの方はすぐに手術を済ませて一応経過観察をしながら普通の生活が出来るようになった。

四人の中で、十年前に子宮がんに罹って治療を済ませている須藤映子だけが、みなが病気でうんうん唸っている間も、四重奏のためにご無沙汰になっていた市民オーケストラに復帰して、元気にバイオリンを弾きつづけていた。

四重奏の中断期間は一年以上となり、その間に友人のチェロを臨時に頼んで一度練習会をしたことが

あったが、あまり盛り上がらなかった。若い腕自慢のチェロで、年寄り連中を何となく上から目線で見るような感じがして、三人は良い気持ちがしなかったのである。三人が病気がらみの環境が続いていて、個人的にも練習があまりできていなかったことも原因だったかもしれない。しかし、世代間の断層と言うこともあり、それぞれが育ってきた音楽的環境の違いが大きく影響しているように思えた。つまりア

マデウス、バリリ、ブダペスト、ウィーンコンツェルトハウスといった往年の名四重奏団や、新しくてもスメタナやアルバンベルク四重奏団を聞いて自分たちの音楽を形成してきた世代と、コンピューターのような正確さでバルトークの四重奏曲を弾き飛ばしたかと思うと、背筋が痒くなるような感情過多な表現を恥ずかしげもなく繰り広げる四重奏団の演奏を耳にしている世代との埋めようのない格差のため

なのである。日和山のみんなも、現在の四重奏団のCDは聞くし、コンサートにも出かける。それなりに感銘を受けたりもするが、コンサートから帰って古いレコードを聞きなおして、

「やっぱり、アマデウスね・・・・」

と言うことになるのである。

須藤映子と違って、水野夫妻は日和山の集まりがない間、楽器に触れることも少なくなり、再開され

たとしても元のように弾けるかどうか自信を失いかけていた。

須藤章の治療は一進一退であったが、二年目に入ったあたりから治療の効果が見え始めた。そうなると早いもので三ヶ月もしなううちに自宅生活となり、検査のために月一回病院に行くだけと言う状態まで回復した。がんは消えていると言うことであった。

日和山のメンバーの気持ちはにわかに明るさを取

り戻した。そして一年半ぶりに四重奏の集まりが開かれた。中断したときにモーツァルトのＫ４９９を仕上げようとやっている最中だったので、この記念すべき再開の会ではその曲から始めようと言うことになった。しかし須藤映子以外は楽器から遠ざかっていて、とても以前のような演奏にはならなかった。ただ本当に久しぶりに四人の音が鳴った瞬間は感動的であった。それは広島の地で約束の出来た弦楽四

重奏が、関門港を見渡すこの部屋で初めて四人の音となった瞬間と変わらないくらいみんなの心に染込んだのだった。しかし調子に乗って次々とモーツァルトの名曲を演奏していったころとは、みんなの状態は違いすぎていた。

「しばらくやったら調子は戻るよ」

といいながらも、この年になってからの一年半の空白が大きいことを思い知ったのであった。

「ここでめげたら駄目だよね。おっくうがらずに調子を戻していきましょうよ。映子さん、みんなをリードしてくださいよ」

こう言ったのは、自らもこの間病気を乗り越えてきた水野孝雄であった。この日は適当に遊ぶだけにして、次回からきちんとやろうと言うことになった。気分を変えて、ベートーヴェンの第一番から始めようと言うことになった。次回の練習会は、個人練習

の期間も考えて二週間後と決まった。

二週間後約束どおり四人は定刻に集まった。それぞれが何らかの不調を抱えてきた期間には、約束した日に四人が集まってくるかさえも決して「当然」のこととはいえなかった。四人が約束の日の約束の時間に顔を揃えたこと自体がひとつの感動であった。しかもみんなニコニコと笑顔で楽器を抱えている。

この日は打ち合わせどおり、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第一番を練習した。みんながこの二週間練習してきたおかげで、二週間前のようなことはなかった。もちろんまだ本調子ではない。この日の休憩時間に、これからのことが話しに出た。

三十五曲の目標はそのままでいいが、これからは一番から順にといったやり方ではなく、一曲済んだら次はどの作曲家のどの作品にするかを自由に決め

て取り上げようと言うことになった。理由は、誰も口に出さなかったが何時また中断せざるを得ない事態が起きるかわからないという思いが共通にあったからである。三十五曲のうちまだモーツァルトの七曲を仕上げただけである。この日やり始めたベートーヴェンの第一番を含めるとあと仕上げたい目標曲は二十八曲ある。作曲家順や番号順ではなく、いま最もやりたい曲からしようということである。

「折角第一番をやり始めたけど、ちょっとこれは後回しにして、ベートーヴェンの十五番にしませんか。大変な曲だからあの『病癒えたあとの神への感謝の歌』とかかれた楽章だけでもいいけど」

この須藤章の提案はみんなにすぐに受け入れられた。まさに病癒えた者が神への感謝を捧げるときなのである。第一番はしばらく横に置いて、次回は同じベートーヴェンの第十五番、それの第三楽章を練習す

ることになった。みんなの演奏意欲が一段と強まった。

次の週の集まりで、『病癒えた者の神への感謝の歌』が関門港を見渡す部屋に静かに響いた。この部分はゆっくりとした動きで、みな自分の音に感動をこめて弾いた。『新たな力を感じつつ』とかかれた部分は感動的なクレッシェンドのあと突然やってくる

が、このあたりから少し書かれている音符がややこしくなる。特に二度目に『新たな力を・・・』が出てくるところではいっそう動きが活発になり、その音楽の要求どおりに演奏するのは大変であった。演奏は何度も止った。さらに『神への感謝・・・』の部分が三度目に出てくるところでは、リズムが複雑になっていて、みんな頭をかしげながら、何度もやり直ししながらの演奏であった。家で練習している

ときにはできても、他のパートが加わってくると勘定がわからなくなってしまう。この楽章だけといえども一日で仕上がる音楽ではなかった。

しかしみんなは、いままさに自分たちが演奏すべき音楽に触れたと思った。かれらは気分をこめて弾くことができる最初の部分を何度も繰り返した。須藤章など胸にこみ上げるものがあるような表情で弾いている。それに気づいた須藤映子は、急に演奏を

やめて、
「お茶にしましょう」
とことさらに明るく言って、急ぎ足で準備に消えた。

それから半年近く四重奏は順調に続いた。その間、脇に置かれていたベートーヴェンの一番のほかに、シューベルトの『ロザムンデ』、最初のリストでは取り上げられていなかったドヴォルザークの『アメリ

カ』が仕上げられた。ここで仕上がると言うのは、ひと前で弾くようなレベルの仕上がりと言う意味ではなく、自分たちが

「これくらいで次に行きましょうか」

と言えば、仕上がったことにするという程度のことなのである。

そのころ新たな暗雲が水野芳江の心臓に忍び寄っ

ていた。彼女の長い持病であるが今度だけは、胸の貼り薬や舌下錠だけでは治まらない状況であった。結局彼女は入院して心臓の血管のバイパス手術を受けることになった。四重奏はまたしばし休業である。水野芳江は、自分がいない間も誰か代わりのバイオリンの人を頼んで続けてほしいと言ったが、前回のチェロの例もあるし、バイパス手術そのものは大して時間のかかるものでもないという認識で、しばら

く休止と言うことになった。しかし休止期間は予想外に長くなった、おまけに水野孝雄までが今度は直腸がんに見舞われて、手術、人工肛門という事態になったのである。水野家は夫婦とも入院と言う総崩れ状態であった。この間も幸いに須藤家の二人は大過なく、ゆっくりと個人練習をしながら、水野夫妻の復帰を待っていた。

水野芳江の心臓がかなりてこずらせたうえに、孝

雄の入院手術もあり、心臓の血管にバイパスを施した芳江と、人工肛門をつけた孝雄とがそろって日和山の音楽室にやってきたのは、芳江の入院から一年後であった。二人ともちゃんと楽器を持ってやってきた。

この日は、須藤章の前例に習って、『病癒えた者の神への感謝の歌』の楽章が演奏された。前回練習してから、一年以上たっているのでそれぞれ忘れてい

るところがたくさんあって、一度仕上げた曲にもかかわらず、スムースな演奏ではなかったが、それでも四人は感動した。

「こう次々と病人が出るようだと、この曲はわれわれのテーマ曲みたいになってしまうね」

と須藤章が冗談を言った。

日和山の弦楽四重奏が始まったとき、夫たちは七

十二才、妻たちは六十六才だった。それが二度の休止期間をはさんで、いま夫たちは七十八歳、妻たち七十二才になっていた。『アメリカ』を加えて三十六曲となった仕上げ目標曲のうち、一応仕上げたのは『病癒えた・・・』を含めても十一曲である。のこり二十四曲全部の達成は遠かった。四重奏団が始まったときにみなが思い描いていた楽団の寿命よりも、現実は随分と短く多難なのだ。でも、かれらは特に

悔いているようすもない。

練習に集まったときの演奏の勢いも今は、ゆったりとしたものになっていた。日によっては課題曲の練習ではなく、気楽に弾けるモーツァルトの初期を何曲か合わせるだけで終わる日もあった。この調子だと、こんどは誰かが特段に病気だと言うこともなくても、四重奏を止めようというときが来るかもしれない。音楽用語に。ペルデンドーシというのがある。

「だんだん遅くしながらだんだん弱く、消えるように」
という意味である。いま彼らはその段階にいるのかも知れない。

〔完〕

＊この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

出来る間に、出来るだけ

2022年10月10日初版発行
著者：山中與隆
編集：山中伶子
表紙素材元：
www.photo-ac.com
・タイトル：関門橋と桜
作者：akintonさん
写真のID：2372008
・タイトル：リビングのフローリング02
作者：きんやぎさん
写真のID：24145998
・タイトル：チェロ
作者：r**********mさん
写真のID：3669919
www.silhouette-ac.com
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105365
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105366
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com